だれもが立山にお参りできるように
佐伯 有頼

生没年不詳

伝説上の人物

越中国守だった佐伯有若の子

仏様のお告げに従い立山を開山

信仰心の厚い国守の子

越中（富山県）国守の佐伯有若の子どもだと伝えられています。

有頼が本当にいた人物かははっきりしません。有頼は、越中の国守に任命された父有若とともに京都から越中にやってきました。

仏のお告げで立山を開く

「立山開山縁記」によると、有頼はある日、父が大切にしている白い鷹を持って鷹狩りに出かけました。ところが鷹が逃げ出し、探すうちに熊に襲われそうになったので、矢で熊を射て、血の跡を追うと洞穴に着きました。中には、仏様が立っておられます。仏様は、「私は世の人々を救うためにお前をおびき寄せた。この立山を開いて多くの人々がお参りに来られるように努めなさい」と言われました。

有頼は早速、お坊さんになり慈興と名乗りました。そして、立山に登る道を造ったり、谷に籠の渡りを付けたりして、人々が立山に入られるようにしました。

有頼の勇気ある行動から、「元服前の若者は立山登山をして初めて一人前になる」とされ、今も学校行事の立山登山に引き継がれています。

夢や志をかなえたポイント！

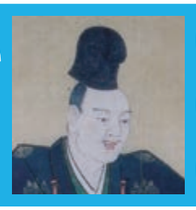
- 借りたものは大切にする
- 神様や仏様を信じる
- みんなのために難しいことに挑戦する

現れた阿弥陀如来にひれ伏す佐伯有頼の姿が描かれた「立山曼荼羅大仙坊Ａ本」（部分）（個人蔵・富山県〔立山博物館〕提供）

豆知識　立山室堂山荘の近くに、「玉殿の岩屋」があります。これが立山開山の伝説で有頼が仏様に出会ったとされる洞穴です。

地方の人々を幸せにしたい
木曽 義仲

1154（久寿元）年―1184（寿永３）年



源 頼朝のいとこ

倶利伽羅で平氏を破る

悲劇の「朝日将軍」

木曽の山中で育つ

義仲は源氏の武将、源 義賢の二男に生まれました。義仲は、後に鎌倉幕府を開く源頼朝のいとこです。

義仲が２歳のとき、父が義朝の子に不意討ちされ、信濃国（長野県）の木曽谷を支配する中原 兼遠の元に預けられました。13歳で元服し「木曽義仲」と呼ばれるようになりました。

火牛の計で大軍を破る

京の都では源氏と対立する平氏が政治の権力を握っていましたが、権力が強くなり過ぎた平氏に対する不満も高まっていました。

26歳の義仲は地方の人々の幸せを強く願い、平氏を倒すため兵を挙げ、信濃から越後国（新潟県）を経て、越中国（富山県）に攻め込みました。これに対して平維盛の軍勢は、加賀国（石川県）から越中へ入り、両軍は倶利伽羅で戦うことになりました。

「源平盛衰記」によると義仲は兵士が眠っているすきに、角にたいまつを付けたたくさんの牛を先頭に攻撃を仕掛けました。これが「火牛の計」と呼ばれる作戦です。戦いは義仲の大勝利となりました。

義仲は京に入って平氏を追い払い、征夷大将軍*となって「朝日将軍」と呼ばれました。

夢や志をかなえたポイント！

- 世の中をよくしたいと考える
- 知恵と工夫で困難を乗り切る
- 情に厚く人を大切にする

義仲軍がたいまつを付けた牛を先頭に攻める様子が描かれた「倶利伽羅合戦絵屏風」（部分）（倶利伽羅神社蔵）

＊征夷大将軍【せいいたいしょうぐん】　武士をまとめる最高の位を意味します。この位を与えられた源頼朝は鎌倉幕府を開きました。

日本一の算学者を目指して
三善 為康

1049（永承４）年―1139（保延５）年8月4日

平安時代の算博士

京都で学者の家を継ぐ

幅広い分野の書物を多数著す

京都の大学者の弟子に

代々にわたって射水郡司（郡を治める地方官）を務める家に生まれました。郡司の子どもを教育する国学という学校で学び、成績がずば抜けてよかったため、学問で身を立てたいと考えました。18歳のときに京都へ上り、算博士*である三善為長に弟子入りしました。

夢や志をかなえたポイント！

- 一生、勉学に励む
- 試験に落ちてもくじけない
- 健康に気を配る

日本を代表する算博士に

算術を習得した為康は次に紀伝学（歴史学）を学び、式部省（法務と教育を担当する省）が実施する省試（上級の役人になるための試験）を受験しました。この試験は大変難しく、為康は何回も不合格となりました。

しかし、その才能が認められ、詔勅（天皇が公務で発する言葉）の文案の作成や宮中の様子を記録する内記という職のうち、一番下の少内記に任命されました。師の為長は為康の能力を見込んで三善家を継がせた後、間もなく亡くなります。為康は忠実に職務に励んでいたので、39歳で算博士を命じられました。

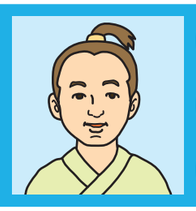
為康は健康に気を配って90歳まで生き、多くの著書を残しました。算学だけでなく、朝廷の文例集、百科事典のような書物、儒教や仏教に関するものなど広い範囲に及んでいます。

為康が編さんした文書『朝野群載』（国立公文書館内閣文庫蔵）

＊算博士【さんのはかせ】　律令制度の時代に大学寮（官僚を育成する機関）で算術を教えた教官のことです。

日本一の刀工に
郷 義弘

1299（正安元）年―1325（正中２）年



正宗門下の優等生

「天下三作」を鍛えた刀工

銘を残さなかった名工

生い立ち不明の刀鍛冶

詳しい生い立ちは分かっていませんが、先祖は木曽義仲に仕えていたと言われ、越中国新川郡松倉郷（現魚津市）に住んでいたので「郷」と名乗ったとされています。通称は右馬允といい、青年のときから刀を鍛える仕事に就き、その優れた腕前は全国に知れわたっていました。

夢や志をかなえたポイント！

- 特技を伸ばす
- 周りの人の優れたところを認める
- 心を込めて物事に取り組む

日本を代表する名工に

義弘が21歳のとき、全国から選ばれた18人の刀鍛冶に、後醍醐天皇のお守り刀を献上するよう命令が下りました。義弘も出品しましたが、お守り刀に採用されたのは相模国（神奈川県）鎌倉の岡崎五郎正宗の作品でした。

自信をもっていた義弘は、鎌倉まで正宗の仕事ぶりを見に行きました。正宗の仕事場は清められ、正装の正宗が魂を込めて刀を鍛えていました。刀の出来は腕次第と考えていた義弘は自分の未熟さを恥じ、正宗の弟子になったといいます。

義弘は技術と精神を磨き、後に義弘と正宗、京都の粟田口吉光の刀が「天下三作」とたたえられるほどになりました。義弘の作品には銘が刻まれていませんが、気品の高さで多くの武将に愛用され、現在は国宝や重要文化財として保存されています。

松倉城址近くに建てられた郷義弘顕彰の碑と日本刀をイメージしたモニュメント（魚津市鹿熊）

豆知識　義弘の弟子の佐伯則重（富山市出身）も名工として知られています。正宗を師とし、数々の名刀を残しました。

越中を平和な国にしたい
佐々 成政

1536（天文5）年―1588（天正16）年

- 戦国時代の富山城主
- 洪水を防ぐ堤防を築く
- 越中の国づくりに力を注ぐ

信長の下で活躍

尾張国春日井郡比良村（現愛知県名古屋市）を支配していた佐々成宗の第５子として比良城で生まれ、父や兄らと同様に織田信長に仕えました。1560（永禄３）年に父の跡を継いで比良城主になり、信長の家臣から選ばれた黒母衣衆の責任者に取りたてられました。

国づくりに力を尽くす

成政は1581（天正９）年秋ごろ、信長から越中（富山県）を治めるよう命じられました。今でも成政の業績をたたえて、いろいろな伝説が残っており、中でも常願寺川の治水が有名です。

越中に入った成政は早速、洪水を防ぐ工事に取りかかりました。大庄村の馬瀬口（現富山市）に築いた堤防は「佐々堤」と呼ばれ、今も残っています。また、道路を造ったり、河原に農地を開いたりして、生活が便利になるよう努力しました。産業を興すことにも力を注ぎ、鮭を塩漬けにして保存する「塩引」の生産を勧め、楽市楽座の実施にも尽力しました。

成政は信長に「自分に服従せぬ農民が一人でもあれば、それは自分の徳化（徳により人を感化する）が不十分な証拠である。自らを恥じねばならない」と語ったといわれています。

夢や志をかなえたポイント！

- 周りの人の不便を解消する
- よいことは取り入れる
- 悪いことがあったときは、まず自分を振り返る

越中で初めて造られた川筋堤防の佐々堤は約２kmにわたって築かれました。

豆知識 成政が秀吉に攻められる前に鍬崎山に数百万両のお金を隠したという伝説が残っています。この埋蔵金を探しに山に登る人も多いそうです。

ロシアの実情を研究したい
嵯峨 寿安

1840（天保11）年―1898（明治31）年12月15日

写真提供者 犬島肇

- 黒川良安の教え子
- シベリア大陸を単独横断
- 国の将来を心配しロシアを調査

医者になるため勉強

寿安の父は金沢で眼科医を開業し、祖父は新川郡東岩瀬（現富山市）で伝馬問屋（郵便局兼運送店）を営んでいました。父は寿安を金沢藩に仕える医師の黒川良安（→24ページ）に学ばせました。寿安は良安の薦めで江戸へ行き、医学・西洋兵学を学びました。

未開のシベリアを横断

江戸で世界のことを学んだ寿安は、ロシアを研究することが大切だと考えました。そして加賀藩にロシア留学の許可を申し出る一方、キリスト教の司祭（聖職者の階級の一つ）のニコライを通じてシベリアを横断して首都のサンクトペテルブルクへ行く方法を調べていました。

藩の許可が出たので寿安は1870（明治３）年５月、函館からロシア軍艦に乗ってウラジオストクへ向かいました。シベリアにはまだ鉄道が通っていなかったので、ハバロフスクに出て黒竜江（アムール川）を船で上り、ネルチンスクからは馬車で未開の原野を走りました。

命からがらサンクトペテルブルクに到着したのは、翌年のことです。寿安はロシアで多くのことを学び、1874（明治７）年に帰国しました。

夢や志をかなえたポイント！

- さまざまな分野の勉強に励む
- 世界に広く目を向ける
- 困難に挑戦し、目標を達成する

豆知識 1871（明治４）年の廃藩置県によって金沢藩（明治２年まで加賀藩）はなくなり、帰国後の寿安は藩のためには働けなくなりました。

農民の声を伝えたい
宮崎 忠次郎

1832（天保３）年―1870（明治３）年10月27日

- 農民に冷静な行動を説く
- 「ばんどり騒動」の指導者
- 騒動の責任をとった正義の人

大凶作でも厳しい年貢

忠次郎は新川郡塚越村（現立山町）の農家に生まれました。1869（明治２）年、新川地方ではいつもの年の４分の１の量しか米がとれず、このままでは飢え死にする者も出かねないと農民は困り果てました。村役人に年貢を軽くしてくれるよう頼んでも、取り立ては厳しくなるばかりでした。

農民のため正義を貫く

忠次郎は「順序を踏んで訴えれば、よい知らせが必ず来る」と農民らをなだめました。農民たちは冷静に物事をとらえる忠次郎こそリーダーにふさわしいと考えるようになりました。

農民たちは忠次郎を推し立てて、年貢取り立ての改善を要求しました。忠次郎は軽はずみな行動に出ないよう農民を説得しましたが、取り次いでもらえないうえに、取り立ては一層厳しくなったので、農民の怒りは頂点に達しました。10万人以上の農民たちが役人たちの家を打ち壊すという大きな騒動になったのです（ばんどり騒動）。

しかし、役所側の武力によって農民側は鎮められました。忠次郎は捕らえられ、責任をとらされて死刑となりました。村の人々は、農民のために犠牲になった忠次郎をしのび、記念碑を建てて語り継いでいます。

夢や志をかなえたポイント！

- 相手の気持ちを思いやる
- 冷静に深く物事を考える
- 取り組んだことには責任をもつ

ばんどり騒動のとき、農民たちが集まった無量寺（舟橋村竹内）

豆知識 この騒動は、農民たちが「ばんどり」を着ていたことから「ばんどり騒動」と呼ばれています。ばんどりは、背当てのない肩掛けだけの蓑のことです。

貧しい人々に目を向けて
横山 源之助

1871（明治４）年２月21日―1915（大正４）年６月３日

- 弱者の立場に立った記者
- 貧困問題を掘り下げた
- 『日本之下層社会』の著者

独学で富山県中学に合格

新川郡魚津町（現魚津市）の漁師の家に生まれ、町内で左官業を営む横山家の養子となりました。小学校卒業後、近所のしょうゆ問屋で住み込みで働きながら自分で勉強し、富山県中学校（現県立富山高校）へ進学しました。当時、職人の子どもが中学校へ進むことはとても珍しいことでした。

優れた社会問題研究書

源之助は中学校を１年で中退して上京し、政治家を目指して法律を学びました。東京で弁護士試験に挑戦しましたが、失敗を繰り返しました。このころに出会った小説家の二葉亭四迷*から強い影響を受け、貧困問題に関心をもつようになりました。

源之助は1894（明治27）年、新聞社の記者になり、労働者など貧しい人々の様子を記事にし、評判を呼びました。群馬、栃木、富山など地方にも足を運び、日清戦争後の不景気で地方の産業が衰えていく様子や貧富の差が広がっている現実を調査し、「貧しい人」の立場に立って伝えました。これらの記事を基に1899（明治32）年に『日本之下層社会』を刊行しました。この本は明治時代の社会問題に光を当てた書物として今でも多くの人に読まれています。

夢や志をかなえたポイント！

- 勉強に打ちこめることを幸せだと考える
- 世の中を自分の目で見て知る
- 「弱い人」の味方という立場を貫く

『日本之下層社会』の初版本表紙（魚津市立図書館蔵）

＊二葉亭四迷【ふたばていしめい】 1887（明治20）年に小説『浮雲』を発表。話し言葉に近い文章（言文一致体）で書かれ、近代小説の先駆けとなりました。

立派な小説を書きたい
三島 霜川

1876（明治9）年7月30日―1934（昭和9）年3月7日

- 強い意志をもち小説家に
- 尾崎紅葉に小説を学ぶ
- 子ども向け歴史物語も執筆

小説家を夢見る少年

砺波郡下麻生村（現高岡市）で医者の長男に生まれました。本名を才二といい、幼いころから本を読むのが好きで、家の土蔵に入って本を読んだり、物思いにふけったりしていました。父親は家業の医者を継がせたいと考えていましたが、才二は小説家になるという夢をもっていました。

多くの分野で執筆活動

才二は父の反対を押し切って18歳のときに上京し、貧しい生活をしながら小説を書き始めました。あこがれていた尾崎紅葉の弟子になることができ、「三島霜川」のペンネームで書いた『埋れ井戸』が文芸雑誌「新小説」に掲載され、作家としてデビューしたのは1898（明治31）年、22歳のときのことでした。

さらに、1907（明治40）年には霜川の代表作となる『解剖室』を「中央公論」に発表し、作家としての評価が一段と高まりました。

その後、霜川は演劇を評論する仕事に力を入れるようになりました。特に歌舞伎に対する知識と鑑賞する力は人一倍優れたものがあり、『役者芸風記』などは名著として現在でも読まれています。また、子ども向けの歴史物語にも情熱を注ぎました。

夢や志をかなえたポイント！

- 子どものときに夢見た職業を目指す
- あこがれの先生に学ぶ
- 多くの分野に興味をもつ

霜川の歴史小説は、子どもたちに大人気でした。
（徳田秋聲記念館提供）

豆知識 霜川は俳句にも本格的に取り組みました。故郷をしのんで作ったとみられる作品が多くあります。

幼い子どもたちに教育を
亜武巣 マーガレット

1877（明治10）年4月16日―1960（昭和35）年1月18日

- 富山県初の私立幼稚園をつくった
- 日本国籍を取り富山で過ごした
- 通訳として富山のために働いた

宣教師として富山へ

亜武巣マーガレットの元の名前はマーガレット・エリザベス・アームストロングといいます。カナダで建築技師の五女として生まれました。26歳のときにキリスト教の宣教師として日本にやってきました。東京で日本語を学び、33歳のときに富山へ移り住みました。

幼児教育を広める

このころ、富山県には公立幼稚園が１園あるだけで、幼稚園に通う子どもがほとんどいませんでした。マーガレットは「幼いうちの教育が大切」と考え、青葉幼稚園を開園しました。子どもたちに清潔で栄養のあるものを食べさせたいと、料理教室を開くこともありました。

「富山でずっと過ごしたい」と考えたマーガレットは1941（昭和16）年、日本国籍を取り、名前も「亜武巣」に変えました。まもなく太平洋戦争が始まり、苦しい生活を送りました。戦後には、連合国軍総司令部（GHQ）との間の通訳を務め、神通中学校（現県立富山中部高校）の廃校を取り止めるよう連合国軍を説得するなど富山のために活躍しました。戦争で壊された園舎は1949（昭和24）年に再建され、現在も卒園生が巣立っています。

夢や志をかなえたポイント！

- 異国を理解しようと努力する
- 自分の考えを分かってもらうため、呼びかける
- 周囲の人に親切に接する

青葉幼稚園の卒業記念写真（左から２人目が園長のマーガレット）（アームストロング青葉幼稚園提供）

豆知識 マーガレットは小鳥が大好きで、窓辺に野鳥を集めるのが得意でした。

大型定置網で漁業の発展に貢献
堀埜与右衛門・酒井光雄

堀埜／1882（明治15）年2月20日―1969（昭和44）年7月6日
酒井／1941（昭和16）年9月14日―1998（平成10）年2月1日

- 氷見に大型定置網を導入
- 定置網を改良
- 定置網を世界に普及

網元を継ぐ

氷見では江戸時代から「台網」と呼ばれる定置網が発達しました。堀埜与右衛門は明治時代に射水郡加納出村（現氷見市）で定置網の網元の二男に生まれました。氷見市宇波村（現氷見市宇波）の定置網の網元の長男に生まれた酒井光雄は、大学の水産学科でシステム工学を勉強しました。

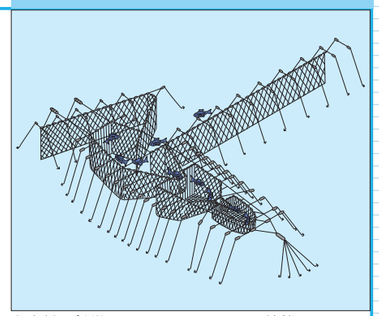
新しい技術を導入

与右衛門は宮崎県で考案された「日高式大敷網」という大型定置網を氷見でも取り入れようと考え、1907（明治40）年に大型定置網を設置しました。するとその年の暮れには、初めて１万尾以上の鰤がとれ、何十隻もの船に積みこまなければならないほどの大漁となりました。大敷網はその後も氷見の漁師によって改良され、普及していきました。

光雄は潮の流れや魚の動きなどを調べ、システム工学*を取り入れて定置網に改良を加えました。人工衛星を利用した魚群探知機を使ったり、コンピュータを用いて魚の値段の変動に合わせて出荷量を調整する技術を取り入れたりしました。また、海外からの研修生を積極的に引き受け、定置網漁を広めるために貢献しました。

夢や志をかなえたポイント！

- 古いものを生かす
- 新しい考え方で改善する
- よいものは紹介する



定置網は沿岸近くの海の中に、魚の道筋をつけるように網を張ります。

＊システム工学【しすてむこうがく】 いくつかの要素がしっかりとした役割を果たすことで、物事の全体や機械をうまく動かそうとする研究です。

傷ついた人を助けたい
大野 ヨリ

1884（明治17）年4月1日―1957（昭和32）年8月2日

- 日露戦争の従軍看護婦
- 日本赤十字社富山支部病院看護婦長
- ナイチンゲール記章を受章

私も看護婦になりたい

上新川郡江上村（現上市町）に生まれました。ヨリが10歳のとき日清戦争が始まりました。戦場で傷ついた兵士を看護する「白衣の天使」に多くの若い女性があこがれ、ヨリも従軍看護婦を目指して1902（明治35）年、日本赤十字社富山支部病院の看護婦養成所に入りました。

優れた看護婦として評価

養成期間を終えて、ヨリは日本赤十字社の看護婦に採用されました。その年の２月、日露戦争が始まると、ヨリは金沢城址内にあった陸軍予備病院へ配属されました。ヨリはここで１年３か月にわたって、日本兵や捕虜を看護しました。

日露戦争が終わり、ヨリは日本赤十字社富山支部病院の看護婦となって故郷に帰りました。ここでも患者を温かく看護し、それが認められて1919（大正８）年に看護婦長に昇進しています。

こうした功績が評価され、1925（大正14）年、ヨリに看護婦の国内最高賞であるナイチンゲール石黒記念牌が贈られました。また、1933（昭和８）年には赤十字国際委員会から、看護婦として世界最高の栄誉であるナイチンゲール記章が贈られました。

夢や志をかなえたポイント！

- 目標の職業に就くために勉強する
- どんな相手にも温かく接する
- 人を助けるために自分ができることを考える

1938（昭和13）年当時の看護婦（前列右端がヨリ）
（日本赤十字社富山県支部『支部百年史』より）

豆知識 従軍看護婦は日清戦争で約100人が初めて派遣され、日露戦争では2000人を超えました。
※「看護婦」は、現在「看護師」と呼ばれています。

人々に娯楽と文化を届けたい
正力 松太郎

1885（明治18）年4月11日―1969（昭和44）年10月9日

- 発行部数を増大させた新聞社の経営者
- 民間テレビ放送の創始者
- プロ野球の誕生に貢献

庄川で遊んだ少年時代

土木建築業の二男として射水郡枇杷首村（現射水市）で生まれました。あまり丈夫ではなく、両親は兄弟と外で遊ぶよう勧めたといいます。5歳のとき、庄川の河原で遊んでいた松太郎は、川でおぼれてしまいました。冷たくなった松太郎を、母親が必死に病院へ運び、命を取りとめました。

新聞・テレビ・政治で活躍

松太郎は東京帝国大学（現東京大学）を卒業し、内閣統計局（現総務省統計局）に入りました。警視庁に勤務して学生運動や米騒動を鎮めるなどの功績を挙げ、その後、経営難だった読売新聞社*の社長になりました。

松太郎は、新聞にラジオ番組欄を載せたり、読者にイベントの入場券を配ったりする新しいアイデアで、経営を立て直すことに成功しました。

また、1953（昭和28）年には、日本初の民間テレビ放送を実現。街頭に置かれたテレビのスポーツ中継は大人気で、テレビの普及につながりました。1934（昭和9）年には、大日本東京野球倶楽部（現読売巨人軍）をつくり、プロ野球を発展させました。

その後、衆議院議員となった松太郎は、原子力の平和利用を進めたため、「原子力の父」とも呼ばれています。

夢や志をかなえたポイント！

- 困ったときに助けてくれる友人をもつ
- 新しいアイデアを出す
- みんなが楽しめることを企画する

正力松太郎像に花束を贈る巨人軍の選手たち（1963〔昭和38〕年ごろ）（正力・小林記念館提供）

＊読売新聞社【よみうりしんぶんしゃ】 発行部数は1000万部を超え、世界で最も部数の多い新聞として「ギネスブック」に紹介されています。

どこに暮らしても平等な機会を
佐伯 宗義

1894（明治27）年2月28日―1981（昭和56）年8月4日

- 富山地方鉄道を設立
- 立山黒部アルペンルートを完成
- 衆議院議員を8期務める

貧しい山村で生まれる

宗義は上新川郡立山村芦峅寺（現立山町）で生まれました。父は山で鉱物を探す鉱山師でした。立山信仰の中心地として開けた芦峅寺集落には当時、学校は小学校1校だけで、ほとんどの住民は山仕事でわずかな収入を得ているだけでした。宗義はそんな村の状況を変えたいと思っていました。

立山を貫通する大事業

宗義は16歳のときに父の事業を手伝うために上京。また、31歳で福島県の鉄道会社の経営を立て直しました。

宗義は県内のどこに住んでも家から通勤できるようにするという構想をもっていました。県内のどこに住んでも、能力に応じた労働・文化・教育の機会が平等に与えられることを目指したのです。

これを実現するため、宗義は富山に戻り、1943（昭和18）年に県内の鉄道、バス会社を統合して富山地方鉄道を設立。また、三方を山に囲まれた富山県が発展するには、立山を貫いて長野と北陸を結ぶ交通機関の整備を図ることが必要だと考え、1971（昭和46）年、立山黒部アルペンルート*を完成させました。

宗義は衆議院議員に8回当選し、政治家としても活躍しました。

夢や志をかなえたポイント！

- 自分の町を住みやすくする
- 広い視野で世の中の仕組みを考える
- 困難なことにも挑戦する

立山トンネルの貫通を喜ぶ人たち。室堂から大観峰を結ぶこのトンネルは、トロリーバスで通ることができます。（立山黒部貫光提供）

＊立山黒部アルペンルート【たてやまくろべあるぺんるーと】 標高3000m級の峰々が連なる北アルプスを貫く観光ルート。完成まで約20年間かかりました。

子どもたちに郷土の童話を
大井 冷光

1885（明治18）年11月7日―1921（大正10）年3月5日

- 記者として立山を探検
- 全国で自作童話を語る
- 佐伯有頼像建立を計画

作文が得意な小学生

冷光の本名は信勝といいます。上新川郡三郷村（現富山市）の農家の一人息子でした。生まれる前に父が、10歳のときに母が亡くなったため、信勝は親戚の家で育てられました。祖母や母から聞かされたおとぎ話に興味を示し、本を読むのが好きで、国語が得意でした。

全国で童話を語る

地元新聞社の記者となり、立山の山岳取材などで活躍しました。童話作家になる夢をもち、「長者屋敷」「佐伯有頼」など富山の伝説を基にした童話を創作しました。

1911（明治44）年、童話づくりに力を入れるため上京し、幼稚園に勤めながら童話の研究を続け、子ども向け雑誌の記者をしたり、ヨーロッパの童話を勉強したりしました。そして、自作の童話を子どもたちに話して聞かせるため、全国を旅行して回りました。1915（大正4）年には、富山市や上新川郡の小学校でも童話を語り、多くの子どもたちに感動を与えました。

冷光は故郷の子どもたちに立山開山伝説の主人公「佐伯有頼」の活躍を心の拠りどころにしてほしいと考え、故郷に有頼（→74ページ）の銅像を建てる計画を進めました。

夢や志をかなえたポイント！

- 本をたくさん読む
- 郷土に伝わっているものを大切にする
- 自分の作ったものを多くの人に知ってもらう

富山に伝わる話を題材に、冷光はたくさんの著書を発表しました。（富山県立図書館冷光文庫蔵）

豆知識 呉羽山にある「佐伯有頼少年像」は、冷光の願いを引き継いだ人たちが立山開山1300年を記念して建てたものです。

高性能のアンテナを作ろう
宇田 新太郎

1896（明治29）年6月1日―1976（昭和51）年8月18日

- アンテナ・超短波の研究者
- 八木・宇田アンテナを共同開発
- 「魚津の三太郎」の一人

大学で研究したい

下新川郡舟見村（現入善町）に生まれ、小学校3年のときに魚津に移りました。県立魚津中学校（現県立魚津高校）から広島高等師範学校（現広島大学）に進み、中学校で教師をしました。その後、電気通信の分野で進んだ研究をしていた東北帝国大学（現東北大学）電気工学科に入学しました。

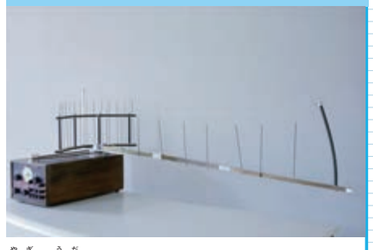
金属棒からヒント得て

卒業後も大学で研究を続けた新太郎は、八木秀次教授の研究室で講師として超短波*の研究をしていたとき、実験装置の近くに金属棒が置いてあると電波が強くなる現象に気づきました。新太郎は、金属棒が電波を導く導波器になることを発見し、「八木・宇田アンテナ」として実用化しました。これが現在、世界中で使われているテレビアンテナです。

新太郎の1歳年上で魚津中学校を卒業して農学者になった盛永俊太郎は、遺伝の仕組みを研究し稲の新しい品種を作るための科学的基礎を確立しました。新太郎、俊太郎、それにテレビの研究で知られる川原田政太郎（→64ページ）はいずれも、明治時代の後半に魚津で学んだ世界的な科学者です。魚津市民は「魚津の三太郎」と呼び、誇りにしています。

夢や志をかなえたポイント！

- 好きなことを徹底的に学ぶ
- 小さな変化にも目を向ける
- 発見を便利な暮らしに役立てる



八木・宇田アンテナ。1930（昭和5）年のベルギー万博に出品されました。（東北大学電気通信研究所提供）

＊超短波【ちょうたんぱ】 地上アナログテレビ放送・FM放送・アマチュア無線・航空無線などに使われている電波です。

女性医師への道を開く
佐藤 やい

1898（明治31）年5月26日―1964（昭和39）年2月27日

- 県人女性初の医学博士
- 日本女性初の病理学教授
- 女医教育の発展に尽力

医院で働く

射水郡新湊町放生津（現射水市）で生まれました。学校の成績は優秀でした。14歳のとき、以前に手をけがして治療してもらった新湊町内の石黒医院で看護婦と子守を兼ねた仕事に就きます。やいは石黒伯院長から医学や医師の話を聞き、自分も医者になりたいと思うようになりました。

博士号を取得し教授に

やいは、東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）に通う先輩から、学校の創設者である吉岡弥生の話を聞き、尊敬の気持ちをもつようになりました。

1915（大正4）年、一人で上京したやいは、吉岡家に住み込むことになりました。家事を手伝いながら昼は学校事務員として働き、夜は受験勉強に励みました。

東京女子医学専門学校に合格したやいは、学校事務を続けながら通学。卒業後は遺体を解剖して死因を調べる病理学研究の道へ進み、この研究で富山県出身の女性として初めて医学博士号を取得しました。また、女性として日本で初めて病理学の教授に就任しました。

戦争で学校や病院が焼失したときは、再建のために力を尽くしました。

夢や志をかなえたポイント！

- 尊敬する先生に直接学ぶ
- 夢の職業に就くため、逆境に負けず勉強する
- 先生や学校に恩返しする

1923（大正12）年ごろの東京女子医学専門学校での手術の様子（東京女子医科大学史料室提供）

豆知識 やいは学生会館の建設も進めました。現在の東京女子医科大学の学生会館はやいの姓をとって「佐藤記念館」と名づけられています。

わだば（わたしは）ゴッホになる
棟方 志功

1903（明治36）年9月5日―1975（昭和50）年9月13日

- 福光に疎開し多くの作品を制作
- 世界的に有名な板画（版画）家
- 国際版画大賞を受賞

絵が好きな少年

青森市の刃物をつくる職人の家で15人兄弟の三男として生まれました。祖母に育てられ、仏様の話をよく聞かされました。生まれつき視力が弱かったものの、子どものときから絵を描くのが好きでした。小学校卒業後は父の仕事を手伝い、17歳のときには裁判所で助手として働きました。

福光で多くの創作活動

18歳のとき、ゴッホの「ひまわり」を見て感動した志功は、「わだば（わたしは）ゴッホになる」と油絵を志しました。21歳で上京しましたが、作品は認められず版画の道に進みます。志功は版画の実力が認められました。

太平洋戦争が激しくなると、1945（昭和20）年、東京から西砺波郡福光町（現南砺市）へ疎開しました。福光の人たちは志功を温かく迎え、志功もこの町が大好きになりました。戦争が終わっても7年近く住み続け、その間、多くの作品を生み出しました。特に1948（昭和23）年は、志功の生涯を通じて1年間に最も多く作品を生み出した年になりました。

志功は1956（昭和31）年、ベネチア・ビエンナーレ展で国際版画大賞を受賞し、「世界のムナカタ」と呼ばれるようになりました。

夢や志をかなえたポイント！

- 情熱をもって制作にあたる
- 自分の得意分野を見つける
- 親切にしてくれた人に恩返しする

福光町の風景を描いた「四季福光風景」の「小矢部早春」（左）と「愛染呼冬」（南砺市立福光美術館蔵）

豆知識 志功は自分の版画を「板画」と呼んでいました。それには、板の命を彫り起こすという意味がこめられていました。

農家を冬の出稼ぎから解放したい
水野 豊造

1898（明治31）年7月16日―1968（昭和43）年2月16日

- チューリップ栽培の技術を確立
- 富山県花卉球根農業協同組合を設立
- 日本初のチューリップ新品種を登録

体が弱かった少年時代

豊造は東砺波郡庄下村矢木（現砺波市）の農家に長男として生まれました。家は貧しく、北海道へ移住しようかと考えるほどでした。また、身体が弱く、他の若者のように出稼ぎ*で家計を助けることができませんでした。

豊造は「出稼ぎに行かずに生活できないだろうか」と考えていました。

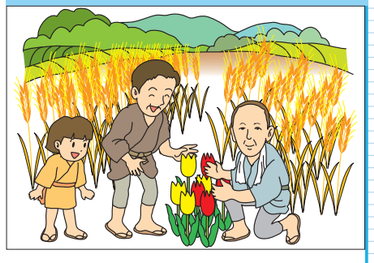
稲刈り後に球根を育てる

ある日、豊造は種屋のカタログでチューリップを知り、栽培してみることにしました。当時、チューリップの花は珍しく、高い値段で売れました。球根はさらに高く売れることに気がついた豊造は、仲間を誘って稲刈り後の田で球根を育てる方法を研究。砺波の気候や土壌に適していたこともあり、球根をつくる農家は増え、アメリカへ輸出するまでになりました。

戦後には、県花卉球根農業協同組合を設立。たくさんの球根を栽培できるようにした結果、富山県は球根の輸出量で日本一になりました。1951年（昭和26）年にはチューリップフェアがスタートし、翌年には豊造が開発した「天女の舞」など3品種が、日本で初めてのチューリップ新品種に登録されました。

夢や志をかなえたポイント！

- 自分にあったやり方を見つける
- 仲間を増やす
- 大切なものを守り続ける



戦争中は、麦に隠すようにしてチューリップを育て、約150品種を守りました。

＊出稼ぎ【でかせぎ】 ある期間、家を離れて働くことです。当時の農家では田畑が使えない冬の間、若者が出稼ぎに行くのが当たり前でした。

日本の文化を守りたい
角川 源義

1917（大正6）年10月9日―1975（昭和50）年10月27日

- 角川書店の創業者
- 国文学の博士号を取得
- 俳人としても活躍

気の弱い文学少年

角川源義は中新川郡東水橋町（現富山市）で、裕福な米穀商の家の末っ子として生まれました。甘えん坊で、小学校入学まで母親が添い寝していました。県立神通中学校（現県立富山中部高校）在学中から俳句を作り始め、国語や漢文が得意でした。弁論部でも活躍し、学校代表にもなりました。

出版で日本文化を守る

民俗学者の折口信夫の著書を神通中学校時代に読んだ源義は1937（昭和12）年、折口の下で学びたいと国学院大学予科に入学しました。折口らから民俗学*や国文学を学び、東京の中学校で教師をしながら日本文化について研究しました。

1945（昭和20）年に終戦を迎え、日本人の文化や価値観、美しい日本語などが否定される風潮に疑問を感じた源義は、「日本の文化を守りたい」と決意。角川書店という出版社を設立しました。質の高い本のほか、値段の安い文庫本も出版し、多くの読者を得ました。

一方で源義は国文学の研究の成果を発表し、文学博士号を取得。少年時代から親しんだ俳句にも精を出し、多くの句集を刊行して高い評価を受けています。

夢や志をかなえたポイント！

- 尊敬する先生に直接学ぶ
- 日本の文化や価値観を守る
- 得意なことをずっと続ける

旧水橋郷土資料館前に建てられた源義の句碑（富山市水橋舘町）

＊民俗学【みんぞくがく】 古くからの庶民の文化について研究し、現在の文化を説明しようとする学問です。

国際的な視野で小説を執筆
堀田 善衛

1918（大正7）年7月17日―1998（平成10）年9月5日

撮影：小池守

高岡生まれの芥川賞作家

国際的な視点をもった小説家

「アジア・アフリカ作家会議」に参加

すべては移り変わる

射水郡伏木町（現高岡市）で北前船回船問屋「鶴屋」の家に三男として生まれました。大正時代には汽船が普及し、北前船が使われなくなったため、「鶴屋」も没落していきました。善衛はすべてのものは移り変わることを身にしみて感じていました。これが作家としての善衛の世界観を形づくります。

戦後の文壇で活躍する

善衛は大学時代から同人誌に加わり、詩やエッセー、評論などを書いていました。大学卒業後、就職した国際文化振興会から中国の上海へ派遣され、そこで第二次世界大戦の終戦を迎えました。

帰国してからは小説を書き始め、1952（昭和27）年に『広場の孤独』などで芥川賞を受賞しました。その後も多くの小説や評論を発表し、中でも『方丈記』を書いた鴨長明の人間性*を見つめ、自身の戦中体験と重ねた長編エッセー『方丈記私記』は、今でも高い評価を受けています。

善衛は「アジア・アフリカ作家会議」の事務局長や議長を務めるなど、国際的な視野をもって活躍しました。スペインの画家ゴヤを描いた評伝『ゴヤ』で、スペイン政府から勲章を授与されました。

夢や志をかなえたポイント！

- 世の中の変化を理解する
- 外国のことに興味をもつ
- 人間性を大切にする

代表作評伝『ゴヤ』執筆の際に参考とした図書の一部（明治学院大学図書館堀田善衛文庫蔵）

＊人間性【にんげんせい】 人間に特有の性質や人が生まれつきもっている性質。人間らしさのこと。

コンピュータで便利な世の中に
金岡 幸二

1925（大正14）年9月20日―1993（平成5）年7月30日

インテック創業者

情報ネットワークを実現

情報サービス産業をリード

技術力の必要性を実感

最高裁判所判事を務めた中新川郡東加積村大崎野（現滑川市）出身の石坂修一の二男として生まれました。幸二は中学校卒業後、軍隊の幹部を養成する学校を出て、特攻隊員として出撃する寸前に終戦を迎えました。日本にも技術力が必要だと実感した幸二は、東京大学工学部計測工学科に入学しました。

通信の自由化を実現

幸二は東京大学在学中に複雑な計算が短時間でできる「コンピュータ」という機械があることを知りました。富山に戻り、金岡家の養子となった幸二は、富山計算センター（現インテック）を設立。県内の企業に、当時とても高価だったコンピュータの共同利用を呼びかけました。

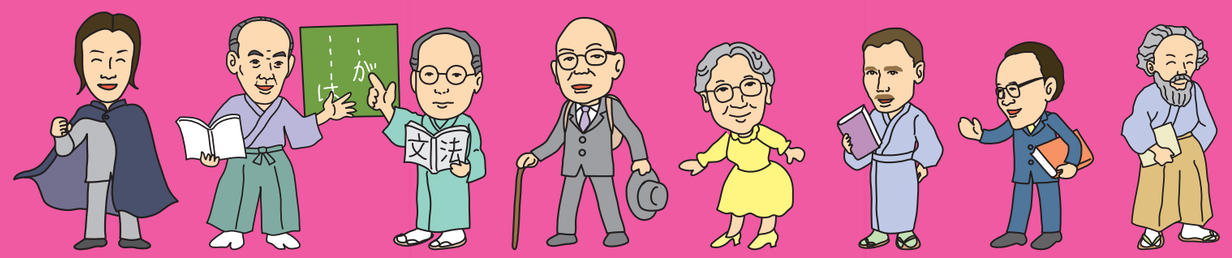
その後、幸二はだれでもコンピュータを気軽に使えるよう、コンピュータを通信で結んだ情報ネットワーク*を作りたいと考えました。当時は国が通信回線を独占し、実現は難しかったのですが、幸二は通信の自由化を唱え続けました。そうして会社の業務を拡大し、日本の情報サービス産業をリードする存在として活躍しました。

また、富山国際大学を設置する富山国際学園の理事長として、私立の学校の振興にも尽くしました。

夢や志をかなえたポイント！

- 技術を身に付けるために学ぶ
- 高価なものは、みんなで使う
- 時代に合わせて、決まりごとを変える

富山計算センター丸の内事業所パンチ室（1968〔昭和43〕年）

＊情報ネットワーク【じょうほうねっとわーく】 複数のコンピュータを網の目のように接続し、多くの人が同時にインターネットや電話を使えるようにしたものです。

先人をもっと知るために